

鳥の北斗七星

宮沢賢治

青空文庫

つめたいいじの悪い雲が、地べたにすれすれに垂れましたので、野はらは雪のあかりだか、日のあかりだか判^{わか}らないようになりました。

烏の義勇艦^{かんたい}隊は、その雲に圧^おしつけられて、しかたなくちよつとの間、亜鉛^{とたん}の板をひろげたような雪の田圃^{たんぼ}のうえに横にならんで仮泊^{かはく}ということをやりました。

どの艦^{ふね}もすこしも動きません。

まっ黒くなめらかな烏の大尉^{たいい}、若い艦隊長もしゃんと立ったままもうごきません。

からすの大監督^{だいかんとく}はなおさらうごきもゆらぎもいたしません。

からすの大監督は、もうずいぶんの年^{とし}老りです。眼^めが灰いろになつてしまつていますし、啼^なくとまるで悪い人形のようにギイギイ云います。

それですから、鳥の年^{とし}齡を見分ける法を知らない一人の子供が、いつか斯^こう云つたのでした。

「おい、この町には咽^{のど}喉のこわれた鳥が二足^{ひき}いるんだよ。おい。」
これはたしかに間^ま違^{ちが}いで、一足しか居^おりませんでしたし、それも決してのどが壊^{こわ}れたのではなく、あんまり永い間、空で号令したために、すっかり声^{こゑ}が錆^さびたのです。それですから鳥の義勇艦隊は、その声をあらゆる音の中で一等だと思つていました。

雪のうえに、仮泊^{かぱく}ということをやっている鳥の艦隊は、石ころ

のようです。胡麻^{ごま}つぶのようです。また望遠鏡でよくみると、大きなや小さなのがあつて馬鈴薯^{ばれいしょ}のようです。

しかしだんだん夕方になりました。

雲がやつと少し上の方にのぼりましたので、とにかく鳥の飛ぶくらいのすき間ができました。

そこで大監督が息を切らして号令を掛^かけます。

「演習はじめいおいつ、出発」

艦隊長鳥の大尉が、まっさきにはつと雪を叩^{たた}きつけて飛びあがりました。鳥の大尉の部下が十八隻^{せき}、順々に飛びあがつて大尉に続いてきちんと間隔^{かんかく}をとって進みました。

それから戦闘艦隊が三十二隻、次々に出発し、その次に大監督

の大艦長が厳かに舞いあがりました。

そのときはもうまつ先の鳥の大尉は、四へんほど空で螺旋を巻いてしまつて雲の鼻つまみまで行つて、そこからこんどはまつ直ぐに向うの杜に進むところでした。

二十九隻の巡洋艦、二十五隻の砲艦が、だんだんだんだん飛びあがりました。おしまいの二隻は、いっしよに出発しました。ここらがどうも鳥の軍隊の不規律なところでした。

鳥の大尉は、杜のすぐ近くまで行つて、左に曲がりました。

そのとき鳥の大監督が、「大砲撃てつ。」と号令しました。

艦隊は一斉に、があがあがあ、大砲をうちました。

大砲をうつとき、片脚をふんとうしろへ挙げる艦は、この前

のニダナトラの戦役^{せんえき}での負傷兵で、音がまだ脚の神経にひびくのです。

さて、空を大きく四へん廻^{まわ}ったとき、大監督が、

「分れっ、解散」と云いながら、列をはなれて杉の木の大監督官舎におりました。みんな列をほごしてじぶんの営舎に帰りました。

鳥の大尉は、けれども、すぐに自分の営舎に帰らないで、ひとり、西のほうのさいかちの木に行きました。

雲はうす黒く、ただ西の山のうえだけ濁^{にご}った水色の天の淵^{ふち}がのぞいて底光りしています。そこで鳥仲間でマシリイと呼ぶ銀の一つ星がひらめきはじめました。

鳥の大尉は、矢のようにさいかちの枝^{えだ}に下^おりました。その枝に、

さつきからじつと停とまつて、ものを案じている鳥があります。それはいちばん声のいい砲艦で、鳥の大尉の許いいなずけ嫁よめでした。

「ががああ、遅おそくなつて失敬。今日の演習で疲つかれないかい。」

「かあお、ずいぶんお待ちしたわ。いっこうつかれなくてよ。」

「そうか。それは結構だ。しかしおれはこんどしばらくおまえと別れなければなるまいよ。」

「あら、どうして、まあ大へんだわ。」

「戦艦隊長のはなしでは、おれはあした山鳥を追いに行くのだそうだ。」

「まあ、山鳥は強いのでしょうか。」

「うん、眼玉めだまが出しやばつて、嘴くちばしが細くて、ちよつと見掛けは偉えらい。」

そうだよ。しかし訳ないよ。」

「ほんとう。」

だいじょうぶ

「大丈夫さ。しかしもちろん戦争のことだから、どういう張合でどんなことがあるかもわからない。そのときはおまえはね、おれとの約束やくそくはすっかり消えたんだから、外ほかへ嫁いつてくれ。」

「あら、どうしましょう。まあ、大へんだわ。あんまりひどいわ、あんまりひどいわ。それではあたし、あんまりひどいわ、かあお、かあお、かあお、かあお」

「泣くな、みつともない。そら、たれか来た。」

鳥の大尉の部下、鳥の兵曹長へいそうちようが急いでやってきて、首をち

よつと横にかしげて礼をして云いました。

「があ、艦長殿、点呼の時間でございます。一同整列して居ります。」

「よろしい。本艦は即刻^{そつこく}帰隊する。おまえは先に帰つてよろしい。」

「承知いたしました。」兵曹長は飛んで行きます。

「さあ、泣くな。あした、も一度列の中で会えるだろう。」

丈夫でいるんだぞ、おい、お前ももう点呼だろう、すぐ帰らなくてはいかん。手を出せ。」

二足はしっかり手を握^{にぎ}りました。大尉はそれから枝をけつて、急いでじぶんの隊に帰りました。娘の鳥は、もう枝に凍^{こお}り着いたように、じっとして動きません。

夜になりました。

それから夜中になりました。

雲がすっかり消えて、新らしく灼^やかれた鋼^{はがね}の空に、つめたい光がみなぎり、小さな星がいくつか連^{れんごう}合^{ごう}して爆^{ばく}発^{はつ}をやり、水車の心棒がキイキイ云います。

とうとう薄^{うす}い鋼の空に、ピチリと裂^{ひび}罅^びがはいって、まっ二つに開^{ひら}き、その裂^さけ目^めから、あやしい長い腕^{うで}がたくさんぶら下^さって、鳥^つを握^{つか}んで空の天^{てんじょう}井^いの向^{むか}う側^{がわ}へ持^もって行^いこうとします。鳥の義勇艦隊はもう総掛^{そうかけ}りです。みんな急^{いそ}いで黒^{くろ}い股^{もも}引^{ひき}をはいて一生^{いっせい}けん命^{めい}宙^{ちゅう}をかけめぐります。兄貴^{にいさま}の鳥も弟^{てい}をかばう暇^{ひま}がなく、恋^{こいびと}人^{ひと}同志^{どうし}もたびたびひどくぶっつかり合^あいます。

いや、ちがいました。

そうじゃありません。

月が出たのです。青いひしげた二十日の月が、東の山から泣いて登ってきたのです。そこで鳥の軍隊はもうすっかり安心してしまいました。

たちまち杜はしずかになつて、ただおびえて脚をふみはずした若い水兵が、びっくりして眼をさまして、があと一発、ねぼけ声の大砲を撃つただけでした。

ところが鳥の大尉は、眼が冴^さえて眠^{ねむ}れませんでした。

「おれはあした戦死するのだ。」大尉は呟^{つぶ}やきながら、
許^{いいな}嫁^{なづけ}
のいる杜の方にあたまを曲げました。

その昆布こんぶのような黒いなめらかな梢こずえの中では、あの若い声のいい砲艦が、次から次といろいろな夢ゆめを見ているのでした。

鳥の大尉とただ二人、ばたばた羽をならし、たびたび顔を見合せながら、青黒い夜の空を、どこまでもどこまでものぼって行きました。もうマジエル様と呼ぶ鳥ほくとしちせいの北斗七星が、大きく近くなつて、その一つの星のなかに生えている青じろい苹果りんごの木さえ、ありありと見えるころ、どうしたわけか二人とも、急にはねが石のようにこわばって、まっさかさまに落ちかかりました。マジエル様と叫さけびながら愕おどろいて眼をさしますと、ほんとうにからだ
が枝から落ちかかっています。急いではねをひろげ姿勢を直し、大尉の居る方を見ましたが、またいつかうとうとしますと、こん

どは山鳥が鼻眼鏡^{はなめがね}などをかけてふたりの前にやって来て、大尉に握手^{あくしゅ}しようとしています。大尉が、いかんいかん、と云つて手をふりますと、山鳥はピカピカする拳銃^{ピストル}を出していきなりずどんと大尉を射殺^{いころ}し、大尉はなめらかな黒い胸を張つて倒れ^{たお}かかりま
す。マジエル様と叫びながらまた愕いて眼をさますというあんば
いでした。

鳥の大尉はこちらで、その姿勢を直すはねの音から、そのマジ
エルを祈^{いの}る声まですつかり聴^きいて居りました。

じぶんもまたためいきについて、そのうつくしい七つのマジエ
ルの星を仰^{あお}ぎながら、ああ、あしたの戦^{たたかい}でわたくしが勝つことが
いいのか、山鳥がかつのがいいのか、それはわたくしにわかりま

せん、ただあなたのお考かんがえのとおりです、わたくしはわたくしにき
まつたように力いっぱいたたかいます、みんなみんなあなたのお
考えのとおりですとしずかに祈いのつて居りました。そして東のそら
には早くも少しの銀の光が湧わいたのです。

ふと遠い冷たい北の方で、なにか鍵かぎでも触ふれあつたようなかす
かな声がしました。鳥からすの大尉は夜間双眼鏡ナイトグラスを手早く取つて、きつ
とそつちを見ました。星あかりのこちらのぼんやり白い峠とうげの上に、
一本の栗くりの木が見えました。その梢にとまって空を見あげている
ものは、たしかに敵の山鳥です。大尉の胸は勇ましく躍おどりました。
「があ、非常召集しょうしゅう、があ、非常召集」

大尉の部下はたちまち枝をけたてて飛びあがり大尉のまわりを

かけめぐります。

「突貫^{とつかん}。」鳥の大尉は先登^{せんとう}になってまっしぐらに北へ進みま
した。

もう東の空はあたらしく研^といだ鋼^{はがね}のような白^{しろ}光^{びかり}です。

山鳥はあわてて枝をけ立てました。そして大きくはねをひろげ
て北の方へ遁^にげ出そうとしましたが、もうそのときは駆逐艦^{くちくかん}た
ちはまわりをすつかり囲んでいました。

「があ、があ、があ、があ」大砲の音は耳もつんぽになり
そうです。山鳥は仕方なく足をぐらぐらしながら上の方へ飛びあ
がりました。大尉はたちまちそれに追い付いて、そのまっくろな
頭^{すくど}に鋭^{ひとつ}く一突き食らわせました。山鳥はよろよろとなつて地面

に落ちかかりました。そこを兵曹長が横からもう一突きやりしました。山鳥は灰いろのまぶたをとじ、あけ方の峠の雪の上につめた^{よこた}く横わりました。

「があ、兵曹長。その死骸^{しかい}を営舎までもって帰るように。があ。引き揚げつ。」

「かしこまりました。」強い兵曹長はその死骸^さを提げ、鳥の大尉はじぶんの杜^{もり}の方に飛びはじめ十八隻はしたがいました。

杜に帰って鳥の駆逐艦は、みなほうほう白い息をはきました。

「けがは無いか。誰^{たれ}かけがしたものは無いか。」鳥の大尉はみんなをいたわってあるきました。

夜がすっかり明けました。

桃^{もも}の果汁^{しる}のような陽^ひの光は、まず山の雪にいっぱい注ぎ、それからだんだんに流れて、ついにはそこらいちめん、雪^{しろ}のなかに白百合^{ゆり}の花を咲かせました。

ぎらぎらの太陽が、かなしいくらいひかって、東の雪^おの丘^かの上に懸^かりました。

「観兵式、用意つ、集れい。」大監督が叫びました。

「観兵式、用意つ、集れい。」各艦隊長が叫びました。

みんなすつかり雪のたんぼになりました。

鳥の大尉は列からはなれて、ぴかぴかする雪の上を、足をすくすく延ばしてまっすぐに走って大監督の前に行きました。

「報告、きょうあけがた、セピラの峠の上に敵艦の碇^{てい}泊^{はく}を認め

ましたので、本艦隊は直ちに出勤、撃沈げきちんいたしました。わが軍死者なし。報告終りつ。」

駆逐艦隊はもうあんまりうれしくて、熱い涙なみだをぼろぼろ雪の上にこぼしました。

鳥の大監督も、灰いろの眼から涙なみだをながして云いました。

「ギイギイ、ご苦労だった。ご苦労だった。よくやった。もうおまえは少佐になってもいいだろう。おまえの部下の叙勲じよくんはおまえにまかせる。」

鳥の新らしい少佐は、お腹なかが空すいて山から出て来て、十九隻に囲まれて殺された、あの山鳥を思い出して、あたらしい涙をこぼしました。

「ありがとうございます。就ては敵の死骸を葬りたいとおもいますが、お許し下さいませうか。」

「よろしい。厚く葬つてやれ。」

鳥の新らしい少佐は礼をして大監督の前をさがり、列に戻つて、いまマジエルの星の居るあたりの青ぞらを仰ぎました。（ああ、マジエル様、どうか憎むことのできない敵を殺さないでいいように早くこの世界がなりますように、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまいません。）マジエルの星が、ちょうど来ているあたりの青ぞらから、青いひかりがうらうらと湧きました。

美しくまっ黒な砲艦の鳥は、そのあいだ中、みんなといっしょ

に、不動の姿勢をとって列び^{なら}ながら、始終きらきらきらきら涙をこぼしました。砲艦長はそれを見ないふりしていました。あしたから、また許^{いいなずけ}嫁^けといつしよに、演習ができるのです。あんまりうれしいので、たびたび^{くちばし}嘴を大きくあけて、まっ赤に日光に透^すかせましたが、それも砲艦長は横を向いて見逃^{みの}がしていました。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部
・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

烏の北斗七星

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>